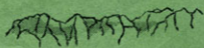


齒 采



第 26 號

志 多

第 26 号



1982

新ハイキングクラブ・横浜支部

目

次

大菩薩峠

山に求めたもの

皇海山

地形図のこと

ハアニング山行 その五

我が家の夏山 「月山」

短歌 山の歌十首

荒川小屋より悪沢岳へ

春の南会津の山旅

正月単独行の北ハツ横岳

藤坂 弘

石川 信子

吉村 英雄

太田 繁信

横山 勝利

鈴木 早苗

古谷 芳子

芹沢 隆久

祖父川 精治

宮沢 のり子

4

5

7

9

10

13

16

17

24

26

私の旅行記

鳳凰三山縦走

那須初山行

青息吐息でクリスタル

ある日・尾瀬

百名山とヤマレンヂニ〇〇〇〇キロ

横浜支部会員名簿

編集後記

鎌田美英子

北村 襄

星野 春美子

中村 賢治

桐ヶ谷 季

渡部 詔子

29

37

40

45

50

51



大菩薩峠

藤坂 弘

丹波から大菩薩峠へ登つてみた。

怪はよく踏まれていた。キリツとした冷気が、冬の近いことを告げている。もう、ジーズンが終つているせいか、途中では、杖を運れた鉄砲打ちと、それから、だいぶ上まで登つてから、下つて来る四人のハイカーに出会つただけの、とても静かな山だった。

怪の脇には、小さな地藏さんがあつたりして、なんとなく、往古の旅人になつたような気持で、長いけれど、さほどきつくない径を、ゆつくりと登つて行つた。

峠についた時には、もう陽はだいぶ西に傾いていた。人影のない峠で、じつと落日を見つめてみると、心はいつしか、竜神温泉を想つていた。

竜神温泉は、紀勢線の南郡からバスで三時間半も奥へ入った、山の中の静かな温泉だ。上御殿、下御殿とか、旅館の名に格式が感じられる。これは、かつての藩祖徳川頼宣公の「別荘」だったことに由来する。

荷物をおいて、外の共同浴場へ行つてみた。も

ちろん内湯もあるのだけれど、なんとなく外湯へも入つてみたかった。

風呂は大きく明るくて、気持が良かった。ここ湯は、肌ごわりがなめらかで、きめを細かくして肌を白くするという。三美人の湯にも教えられてゐる。先刻、旅館の前ですれ違つた村娘の肌が、オヤツと思う程美しかったのは、この温泉のせいかもしれない。

誰もない温泉で、じつと目をとじていると、小説「大菩薩峠」を思い出した。ここはこの小説の舞台にもなつてゐる。天誅組に加入した机竜之介は、十津川の戦で爆薬のため失明する。この村の滝で目を洗い治癒するというくだりで、竜神の巻として登場する。

明日はその曼陀羅の滝へ行つてみよう。そこから、護摩ノ壇山が見えるという。高野山から護摩ノ壇山を越えて、ここへ下つて来るハイキングコースもあるが、私はまだ歩いたことがない。良いコースだそう。

小説では舞台が、あちらこちらと移動するが、機会があればその一つ一つを訪ねてみたい。

小説の舞台のように、想いもあちらこちらへと飛ぶが、関西からの大菩薩峠は、あまりにも遠かった。いつか、いつかと思う内に、月日は流れてい

今、私は峠に立っている。
かつて、はるかな距離をおいて見つめていた峠
に立って、そこから竜神温泉を想い起している。
今、二つの地の間の距離はなくなつて、時の流
れだけがそこにある。

陽はすでに没して、雲だけが赤く彩られている。
あたりは急に冷えてきた。
私は荷を背負い、灯火をつけて、向う側の屋根
のとりつきにある小屋に向つて、少し急な径を下
つていつた。



山に求めたもの

石川信子



久し振りで、しだの原稿を書き始めました。一
体、しだの原稿を書くのは、何年振りの事なのか
しらと、以前のしだを出して見ましたら、S・48
4・20(金)22時15分、第24号の原稿を書き終つ
て以来の事でした。

いつまでも、いつまでも、山が歩けると思つて、
横浜支部の石川一男さんと結婚したわけだった
のですが、とんでもないことで、48年夏の白馬
以来、私一人育児に追われておりまして、回数こ
そ少ないですが、専ら彼一人、当然という顔行で、
いそいそ出掛けては、山の話だけで我慢しなさい
とばかり、帰つてきて、詳しく報告するのを聞く
の繰り返しで、八年間が過ぎました。

今、こうして子供の勉強机に向つて、しだの原
稿を書いている自分に、なんだか妙な気分を覚え
ます。

支部に席を置いてみると、山がいつまでも身近
に感じられ、又一旦退会、再入会すると、名簿順
が彼の方を下つてしまひ、せつかく昇進したのに
残念な気がして、ちつとも山行や例会に出ないの
に、ニユースばかり送付して頂いて、申し訳なく
思いながら、ついずるずる過ぎてしまひました。
今日は、保育園で運動会の親子お遊戯の練習を
してきました。家事、子供とせわしない毎日の中
で、九月号ニユースに同封された、白しだの原
稿用紙四枚が、目の前に千ら千らして落ち着かず、

今日習ってきた「ササ・サンバ」のお遊戯をしく踊る為には、早く原稿用紙を何とかしなければと急に思い立って、今こうして書き並べている次第です。

彼は、県展に出品する版画の事で頭が一杯らしく、私の誘いにちつとも束縛してくれず、仕方なく、近況報告の手紙のような文を、何とか原稿用紙四枚以上にしようと思案しており、

12年12月発行のしだ18号に投稿以来、山に対する気する気持ちをいろいろ書いてきたような気がし、今こうして山から遠ざかり、20代の青春を山一色で送った自分を振り返る時、「素晴らしい20代だったなあ」という満足感でいっぱいになります。

今年には二十回年振りかで小学校、中学校のクラス会に出席しました。皆に比較して、結婚も遅かったです。子供も小さい、けれど、私の青春が一番充実していたなあ、考えを新たにしました。

一人っ子だった事が、仲間が素晴らしかった事が、山を愛する私にしました。そして私は山に何を求めたのでしょうか。

私は一人の人間として、「常にやさしく素直でありたい、美しい心と豊かな心の持ち主でありたい」と求め続けてきました。

そのために本を読みました。日記を書きました。音楽を聞きました。洋裁もしました。絵も見ました。字を習い、花を生けました。歌も歌いました。これらの事をしている時、自分の求める人間になれるような気がしました。そして、何よりも山を歩いている私の中に、その求める自分を見出したのです。この心を求め続ける限り、私は山を歩き続ける事を、求め続けるでしょう。

この春大山へ行きました。一番小さい子は二才半、まだ全然歩きません。山は自分おあずけになりそうです。膝が弱いので、下りでは「お母さん早くー」とおおられました。「今、私はあんなに憧れていた山を登っている」と胸があつくなりました。

私は山を忘れる事は、いけない事だと思っています。

息子たちに行いて行けなくなった時には、一人で小さい山を歩いている自分を見出す事でしょう。S 56・9・25(金) 23時30分



山 海 皇

(S 56. 8.29~31)

吉 村 英 雄



いつか登りたいと思つていた望海へ、碓さんと二人で行きました。今年三回目の山行で、いずれも碓さんと一緒でした。昨年、埼玉へ居を移して以来、例会にも行けず、また支部山行にも何かと都合があつて行けなかつた私にとつて、碓さんとの山行が、新ハイとの縁を、細くともつないでいてくれます。今回の山行予定は二日目庚申山荘泊、二日目望海復後、通洞駅前旅館泊、三日目赤城山に登り帰路につくというものでした。

足尾線通洞駅からタクシーで国民宿舍かじか荘へ、そこから一の鳥居までは林道を歩き、一の鳥居から庚申山荘までは、沢ぞいの道を行く。庚申山荘は、神社にもなつていて、室の一角に猿田彦らしきものを祭つている。ここの管理人は愛想がなく、新ハイS 54年9月号で、山口さんが、この小屋で朝四時に食事をしていたら怒られたと書いていたが、ごもありませんかと思つた。そこで碓さんが、ご機嫌を伺いがてら、パッチを求めたら、山に登つてから売るとのこと。しごくもつとも二人で感心する。こんな時は、酔つねつて早く寝るに限ると、夕食にビールで明日のお互いの健斗を祈つて乾杯。汗を流した後のビールのうまいこと。

翌朝は小雨であつたが、四時に出発。小屋の裏から庚申山へ。雲山らしく、滝や鎖場がある道を、約一五時間で山頂へ。山頂は展望があまりないが、少し先に行くと、望海、日光、武尊などが良く見える。雨も止み、雲も切れて、展望良好。

庚申山から鋸山までは、十峰とも十一峰ともいわれているが、ヤブごぞや鎖場の道を登降する。二五時間か、リ鋸山へ。鋸山から見る望海は、山頂から西側に張り出した尾根が見えるため、鋸山より手前で見える形の方が良かった。また群馬県側は、鋸山から望海にかけて、

植林が標高一五〇〇米程度まで進んでいた。

鋸山から急降下した後は、ヤブこぎしながら、ひたすら望海へ。道は尾根を進むが、松木沢へ迷いやすいので注意。望海の山頂は木立ちの中にある、二等三角点と宝剣が立っている。木立の間から、上越国境、赤城、日光、富士山などが見える。尾瀬が見えないのが残念。登頂を祝って乾林山頂で飲むビールは、何時でもうまい。時間をみると、一〇・三〇を過ぎていて、コースタイムで約四時間のところ、我々は林みを入れているが、六五時間かかっている。ここでは、はやばやと計画の赤城行きは諦めて、かじか荘で温泉に入つて、一杯やることに変更する。

温泉、ビールに希望を託し、鋸山から六林班峠に向う。鋸山から六林班は、広い尾根のヤブ道であるが、標識が木に取り付けてあるので、迷う心配はない。六林班は木に小さな標識がある、ちよつと見通しそうな所である。峠から小屋までは何本もの沢を横切りながら、ゆるやかな下り道。峠から三分程で水場があり、いままでの疲れをいやすために乾林。すでに時間は十四時を過ぎていて、かじか荘での温泉、ビールは断念し、小屋泊りにする。

やつと小屋にたどりついたのは、十六三〇。過ぎで、今日の行程は十三五時間であった。ただちに

パツチを買って求めた破さん、このパツチを手に入れるため、今日一日の苦勞を思い浮かべ、しはしは頭を押える。とにかく、望海登頂の目的は達成したので、ビールで乾林と思つたが、ビールは飲み尽したので、残りのウイスキーで乾林、何でも飲めればうまい。

翌日も快晴。前日とは打つて違って快調に下り、一の鳥居で庚申七滝を見物して、かじか荘で温泉、ビールを堪能して帰路についた。

「コースタイム」 かじか荘(1345) — 一の鳥居(1455) — 庚申山荘(1720) — 鋸山(820)

— 望海山(1025) — 六林班(1340) — 水場(1230) — 六林班(1340) — 水場(1350) — 庚申山荘(1635) — 水場(1420) — 庚申山荘(1635) — 水場(1550)

かじか荘(1030) — 費用 通潤 かじか荘 タクシー 一三六〇円

鷹宮地 庚申山荘の泊素泊り 一五〇〇円
水場あり。

小屋の管理人によると、今年はコースを整備していないそうで、このため我々は時間がかかったのかもしれない。

太田繁信

山に登る際の必需品として、地形図があげられる。もつとも、本屋には昭文社、あるいは日地出版発行の登山地図が置かれ、これには、水場や危険箇所や、何といつてもコースタイムが書き入れであるから、地形図でなく、これらを利用する人も多い。僕も度々参考にするところがあるが、やはり登山の前には、その付近の地形図を揃え、持参する。登山地図には何かなじめない。ともかく、こんな調子で登る度に、というより登ろうかなと思つただけで買つてきた訳だから、手許にある地形図の枚数はかなりのものだ。日本全国四千四百枚余りの地形図（二万五千分の一）があるが、その四分の一近く、つまり一千枚ばかりである。もちろん買つただけで使つていないものが、半分以上あつて、それは棚の上に置いてあるが、一度でも使つたものの整理が大変である。今の所、靴の空箱を利用して、十何箱かに分けて収めているが、その箱の置き場にも困るようになってきた。（何かうまい方法があつたら教えて下

さい。） そんな苦労もあるが、何といつても、楽しみなのは山から帰つたあと、地形図に自分の足跡（踏破コース）を書き入れることだ。何故かこれを朱線で記入する人が多いらしく、朱線病なる呼び方もあるほどだが、僕の場合は違う。朱は確認した三角点を示すのに使い、足跡は紺にしている。つまり僕は、紺線病であり、三角点病なのである。寝る前にどんなに疲れた山行の時でも、サインペンと色鉛筆で、地形図に記入するのが習慣となつてしまつた。

日本全国四千四百枚その全部は無理としても、半分の二千枚には自分の足跡を示したい。三角点は、五千の標石をこの掌で撫でみたい。かなわな



ハプニング山行

その五

横山勝利

五六八年八月一日 機上からは昨年、登った日
高幌尻岳が真下に見える、すばらしい天候だった。
阿寒岳を登り、二日は雄阿寒岳、三日は斜里岳、
斜里山頂はものすごい風で、それとベトベトする
様な感じの南風、早々に退散した。阿寒から斜里
周辺は、此が異常発生しており、列車の中まで飛
びかかっているのには閉口したが、連日の猛暑の
影響であらうか？ 斜里から岩尾別温泉、木下小
屋へ入る。四日、台風は房総沖、たいした事もな
かろうと、羅臼岳から羅臼温泉に下る予定で出発
する。極楽平の辺でパラパラと雨が降るが銀冷水
を通ざる頃から、カスガ降りてきて、雪渓も中程
まで行くと、雨足も早まりザックごと飛ばされる
のではと思う程の風で、天幕を張れる状態でない。
羅臼越えは断念し、羅臼平まで再び木下小屋へ
戻る。今年、雪が多く踏み跡も良く判別できない
程で、羅臼側で道がわからず、サシレイ沢へ迷う
例も多くあるとの事であった。

木下小屋は温泉付き兼泊りのみで千三百円、小
屋から八十メートル手前に、近代的ホテル『地ノ
涯』がある。木下小屋はランファでセニオのおはあ
さんと若いバイトのS君とがやっている。手電話
はあるが、きつとおばあさんの為設置したので、
ろう。トイレは外に出て、小さな橋を二ヶ所はか
り渡りホテル側にある。野天風呂は小屋の前に側
面だけ覆ってある。

斜里から同行したWさんは岩尾別まで歩いて降
りたが、私はここで停滯とする。夕飯からおはあ
さんが食事を作って下さり、恐縮しながらも御厚
意に甘えさせて戴く。「すじこ」が出たのだが、
その量の多さに驚きました。こんな気分の良い小
屋で、風呂もいつでも入れるし、天気回復を待
つのみである。

五日、朝方は小雨、バスは一日二本。朝七時半、
夕方は五時半。十時頃から雨足が早まる。台風が

持近、これは早目に降りた方が良さそうだななどと
考えながら日中を過す。夕方のバスは連休になつ
てしまった。熱低になるだろうと思つていたら、

小屋の前に幅二メートル、高さ約五メートル
で、両側は石垣でできてゐる小川がある。水量は
少ない。夕方、途中の幕場から、大阪のワングル
が降りてきた。小屋の入口は、キスリングの山に
なつてしまつた。彼等の為にストーアを焚く。夜
十時近くまで、おぼあさん達と山の話に花が咲く。
外は激しい雨だが、河原にはまだ天幕が二張りほ
どある。川を流れる石の音がゴロンゴロン。ライ
トを照らして見たが、まだ川底が見える。私の寝
ている部屋の窓側に、大きな石が三つ落ちてゐる
のだが、庭石を取る時に落ちたとの事だが、気持
悪いので足を窓側にする。夜十一時、石のぶつ
かる音が時々高く、ゴツンと川の方から聞えて
くる。何十年もなるともなかつた小屋だし、たい
した水源も上には無いなどと考えながらも、浅い
眠りについた。

「避難してください」何も持たずに避難して
下さい」と、けたたましい声に飛び起きたが午
前二時。うまい具合に、いつでも登れるように、
サアザックに食糧、水筒、雨具、ヘットランフ等
が入つていたので、一、二分で準備でき出口へ。外

へ出られる状況ではない。出口はキスリングの連
中が、何やら、いる物などをサアザックに詰め替
えてゐるやうで、手のつけようもない。バタバタ
してゐるだけである。これではどう慌ても駄目
である。再び部屋へ戻り、本格的にパツキングし
て服装を整え、合羽を着て登山靴をはき、ザック
カバリーをして準備完了。出口はまだゴタゴタして
ゐる。乾パンをポケットに一生懸命つめてゐる人
やら色々といふ。総勢約二十名。「出る時は一括
に出しましょう」と言う小屋の主人の声。その声を
無視して？ 先に行く人もあり、この間約三分
「出ましょう」との声と同時に小屋の裏側から中
を通つて水が流れ込んできた。主人を先頭にして
外へ出る。登山道側へ二十メートル位登つた所に
管林窟のトイレがあるが、「一般の人は使用でき
ない」立派な作りで中に十二三人入れた。小屋か
らランフを持って出た事で、明るさが安心さを増
したようだった。私は外にいたのだが、雨風が強
く、衆生林が一気に水を吐き出しているような感
じがしたが、闇夜の為だけだろうか、着込んで出
てきたのだが、体がごんごん冷えてきたのには少
なまいかつた。セーターを着込めば良かったと思う。
ライトの明りで山小屋を見れば両側、真中と水が
流れてゐる。野天風呂は影も形もない。別の小こ
な小屋は流されてゐる様だ。前側にあるホテル従

乗員宿舍は濁流に辛じて持ちこたえているが、時間との戦いだ。四時、やっと明るくなつてくる。五時半、雨も小降りになり、風もおさまる。六時半、雨も上り、ホテル「地ノ涯」へ山の斜面から裏側に降る。ホテルの被害もひどい。浴場が完全につぶされている。建物の一部に亀裂ができて、だんだん傾いてきている。

六日 ホテルに避難することとなる。十時頃おにぎりニコ。その他にもおかずがついたのにはびっくり。大部屋でくつろぐ。テレビは、北海道各地の被害の大きかつた事を報じている。午後、自衛隊のヘリが来る。急病人の女性を乗せる。さすが自衛隊、狭い場所にもまく発着するものだと感心した。岩尾別にあるユースホテルの途中はヘリで全員脱出したとか、どこぞこの橋が流されたとか、けんけんごうごう、小屋へ泊つた連中でも、オートバイ、登山靴、テント、スボンなどと失くしてしまつた人も何人かいたようだ。

空は真つ青に澄み、何もなかつたようにトンボが飛び交う。午後ともなれば、テレビも余り災害の報道をしなくなつた。夜、布団は充分にあり、案に眠る事ができた。家への連絡は自衛隊だと思ふが、連絡を取つていただけだ。

二日、朝方、小屋までの道を作る。倒れている木をのこざりて切り、川には板を渡し橋がかりにした。川の水は雪解けと一猪で数分しか入つていられない。小屋は一階は土砂で埋まつて、二階はどうやら助かつた。入口にあつたストローフだけでも掘り起そうと一生懸命掘つて見たが、石やら木やらがひつしりで、スコップなどでほとも手のおえる代物ではない。ただ、啞然とするばかりであつた。小屋のおばあさんは、涙を流して別れを惜んでくれたが、何んと云つて慰めて良いのか、言葉がなかつた。

地元の救助隊から状況の説明があり、道路寸断の為、山越えして岩尾別と知床五湖の途中の車道まで、一般客共々十二時半に降りる事となる。この人質の確認が大へんな仕事だ。何回やつても救が合わない。救をしているのに写真だとか、仲間と別々になるとかでウロキウロキウロキするからだ。総勢、約百五十名、登山者を先頭にする。川には大きな木が倒れてあり、橋にしてロープを張つて誘導してくれる。ササなどもきれいに削つてあり、難なく車道に出られた。ここからバスやらトラックに分乗してウトロへ、ここで自由解散になる。料金は道路寸断で出られず、羅臼横断道

路を経て北方領土を見ながら羅臼温泉ホテルへ。

八日、釧路から帯広へ、途中で震度四の地震があり、たいした事もなからうと思つていたら、線路が陥没でストップ、代替バスで帯広へ、そうしたら開通した列車の方が早くついて、せかすことせかすこと。岩見沢までの予定が滝川でストップ。

我家の夏山

月山

向いの都屋の野草の会のおばさん連の、早朝のお喋りに、五時過ぎにはKも私も、三オになる息子も、すっかり目が醒めてしまった。昨日の蔵王の疲れを癒すため、ざりざりまで寝ているつもりだったのに。仕方なく六時、行動開始。月山登山者のために、朝食は早く用意してくれ、さらに定期バスに間に合うよう、バス停まで車で送つてもらおう。こんな親切は、やはりペンションならではのことか。気をさかせたつもりだったが、朝食

代替バスで札幌へとの事だった。国鉄の手遣いで代替バス無し。私は滝川駅の待合室で眠る。

九日、岩見沢へ、そして苫小牧へ出て函館へ、十日の朝、上野の駅に降りた時には「地、遅い」この時間の長さとの組合せに、奇妙な愛着を感じていた。(五六年八月)

鈴木早苗

用にと買求めたパンと牛乳は、そのまま今日のお弁当にする。

日曜日ということもあって、バスには登山者の姿も多い。快適だった国道も、寒河江タムの工事現場あたりから細くなつてカーブが増え、車に弱い息子の事が心配になつてくる。気を紛らわせようと、ずつと話かけてはいたが、志津を過ぎて林道に入り、カタカタ道になると、息子の我慢も限度となる。長い五分間だった。靴沢に着いた時

は、親子ともどもホツとする。

山小屋が何軒かあるだけの山の中を想像していた絶頂は、ここだけ道路も舗装され、スキー客のためか、宿泊所や売店がずらりと並んでいて、とてもにぎやかだ。皆、リフト乗場へ向う。登山道に入つてゆく人は誰もいなかった。リフトはスキーヤーとハイカーで長蛇の列で、乗るのに三〇分近くも待った。天気は上々。昨夜の星空の約束どおり、青空が次第に広がつてゆく。リフトに十二分間束縛している間に樹林帯を抜け、残雪が目に入つてくる。なだらかな山の稜のカーペットに、残雪の白が一段と鮮かだった。「雪がある、雪がある」と息子もうれしそう。先程の車中での気分が悪さは、すつ飛んでしまったようだ。

リフトの終点からは、お花畑の中の木道だ。イワカカミ、ギスゲ、チンケルマ、シヨウシヨウバカマ、イワイチヨウなどの高山植物は、どれも皆なつかしい。木道が歩きやすいのか、息子は私の手を振り切つて、どんどん歩いてゆく。雪渓を渡るのも恐ろしくもせず、滑べるのがうれしいのか、スキーだといつて、ひとりほしやぐ。空気が冷たくて、それほど暑さは感じないが、日射しは強烈である。振り返ると、朝日連峰、西香尊と展望もよくきく。

スキーをしている大きな雪渓を越えると、いよ

いよ本格的な登りなので、息子はKが背負う。険線に出たところが牛首。ここからは、羽黒山、月山、湯殿山の出羽三山を巡る信者たちと多くすれ違ふ。そのたびに「ボクはラクチンだね」と声を掛けられ、息子はテレテ苦笑い。「パパは大変だ」と言われて、Kは息子の重さ（体重17kg）が一層こたえるようだった。牛首からは、今山行で最もさつぱり登り、その上、人が多くてへより優先とは限らない。時間もかかった。

カジ小屋を過ぎ、急な石段を登ると、やつと平らな山頂の一角に出た。わあ、感激!! お花畑のそこからは、月山山頂の左に端正な姿の鳥海山。さらには庄内平野から日本海まですつと見渡せる。石には昨日歩いた蔵王山。そして後には朝日連峰などの峰々が、雲海の上に連なり、素晴らしい大展望だ。

胸の締めつけられるような感激を持って、山頂の月山神社に参拝。一人三百円也でおほらいをしつてもらう。本式かどうかわからないが、皆、屋根の上にお賽銭を上げるので、それにならう。鳥海山を正面に見ながら、お花畑でお弁当。ウサギギク、タテヤマリンドウのほか、知らない花々に包まれて、たとえパンと牛乳のお昼でも、最高の味がする。心まで雲の上のようなウキウキとした気

分であつた。

昼寝タイムでもあり、息子を背負い下山。年輩の人も多くて、時々道はつかえ、ゆつくりペース。息子はすぐ眠ってしまった。背負っているKは大変。起すまいと気を遣いながら、そつと歩き、休んでも下ろすわけにもゆかず、とうとう腕がしびれてしまった。息子の成長はうれしいが、背負つて山歩きは、もう限界かも知れない。親子で行ける山も、当分限られてしまうのかと少々残念だ。

姥ヶ岳分岐で陵線ともお別れだが、何となくひかれる山なので姥ヶ岳へ寄り道。池塘のある静かな山頂からは、雲海が見事だった。振り向けば、ひととさわ高い月山山頂に霧が上つてきていた。柔晴らしかつた月山に別れを告げ湯殿山へと下りる。姥ヶ岳分岐からグングン高度を下げ、月光坂の難所。鉄梯子の金月光。沢添いの水月光と続く。先に行こうにも、人がつかえて行けず、もどかしい遅々とした歩みで、人の後をついてゆく。まもなく湯殿山。ここからは観光客の世界だ。バスの時間が気なかりで、先を急ぎ湯殿山本宮は見落してしまった。仙人沢祈禱所から専用バスで仙人沢のバス停へ。

山での暑さが嘘のように肌寒い。バスの時間も丁度よく、途中乗り継いで、朝、出発したバス停

へ戻る。電話して迎えに来てもらった車で、無事ペンションへ帰着。

昨夜の星空とうつて変つて、雨がポツポツ降り出してくる。寒い。夏は山の上だけだったのか。昨日は叡王、刈田岳から地蔵岳まで、息子もひとり歩き、よく頑張った。そして今日の月山。ひと言では言えぬような、素晴らしい山だった。一九八〇年に一九八〇Mの月山というのも記念になる。冷夏ではつさりしない天候が続いているが、山では好天にめぐまれ、ラッキーだった。これで我家の今年の夏山も終わった。快い疲労と、楽しい思い出を残して。

(S55年8月3日)



短歌

山の歌十首

古谷芳子

雪溪を乗越たりて白馬しろうまの背に立ちたるも霧の中なり

岩陰にやさしき安こま草の 苦しき登山の時の間に見つ

霧深かき深山に咲ける黒ゆりの 露を宿して頭こゝろたれ居り

明け初むる大気冷えつつ木曾駒の 遭難の碑に霧こもり居り

雲の上に咲き乱れ入る花々の 競い咲きをり傍そばきものを

原生林躡々とせる暗き山 倒木朽ちて苔の積るる

幅せまき滝に逆らひ登り行く 暗き谷間に薄日こぼるる

山波のすべて白銀しろぎんに覆へるも 飛雪の舞に尤り渦巻く

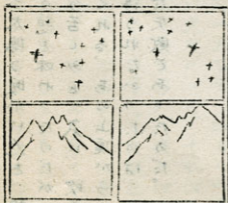
人気ひとけなき山に入りたりわれ一人 梅吹く風の胸にしみ入りくる

氷雨ひこめ降る山路に昏の訪とひ来れば 雪くこりおり崩るるを見つ



芹沢隆久

懐中電灯で時計を照らすと、午前3時、小屋の周囲のテントサイトは、既に灯があちこちに、行き来し、出発の準備に余念がない。傍らに寝ている下君も起き出した。私達は昨日の失敗にこりて、当初の計画よりも一時間半も、早く起き、4時30分までに、出発と決めていたのだ。失敗と言っても、到着が遅れて、小屋番に迷惑をかけたとか、南アルプス特有の雷雨の洗礼を受けたという訳ではない。コースタイムも予定通りだったし、この荒川小屋にも5分遅れの12時15分には着いているのだ。唯、私達が失敗と感じたのは、あの赤石岳の山頂で展望が得られなかった事だった。



荒川小屋
より

悪沢岳へ

その日、百間洞の小屋を5時35分に出た時は、雲一つない碧空が、聖岳や兎岳の方に広がっていた。百間平への登りで、遠く槍、穂高連峰を望み、中央アルプスを、そして、真逆に塩見岳や、他の南アルプス北部の峰々を仰ぎ、子真を振りまくったり、冗舌になったりし、私達は天気感謝を通り越して、上気嫌で浮かれ過ぎて、いたのかもしれない。

午前9時00分に、赤石岳頂上へ着いた時には、東半分は完全に霧の中、富士の影さえ見えなかった。やがて北北西の北アルプス方面が同様になるにも、さして時間を要しなかった。それでも私達は雲間

から洩れる太陽の暖かい光を、頼りに、頂の憩を味わったのだが、長い登りの苦しみを一気に、吹き飛ばしてくれる、あの山頂からの大展望が得られなかったのは、私達の大きな失敗であったのだ。



4時20分、昨日と比べ、まだ薄暗い中、小屋を出発。テントサイトの間を縫うように、径は登っていた。朝の冷気が心地よい。最後の水場のあるカレ場を越えると、大きなお花畑があったのだった。最盛期のシナノキンバイの黄と、ハクサンイチゲの白が、一面をおおっていた。北アルプスよりも高山植物が豊富な感じだ。唯、私にはそれら可憐な花の名が、いちいち判らない。

ふと、前方を見上げると、遙かに浮城のような富士山が、朝焼けの聖海の中から、ぼっかりと顔を出していた。入山4日目にして、初めて見る富士だった。それは北

岳や鳳凰山から見た富士より、小さく感じた。大気の関係なのかもしれない。しかも登るにつれ、富士の峰は、益々高くなり、放たれた風船のように、そのまま遠ざかっているように、そのままだから、私達が富士に見とれた格好で、歩を緩めていると、横も一人の若者が、物も言わずに、追い抜いていった。富士や手前の赤石岳に眼もくれず、ものすごい速度だった。それは私の何年か前の登り方に、良く似ていた。まるで遮眼帯をした競走馬のように山頂をめざして、一気に登っていた。もちろん、今の私には、しようと思っても出来ない、たとえ、出来ても、そうはしない

だろう。けれど若者を批判は出来ない。それが若々なのだから。F君も若者だが、そんな闇雲なところははない。むしろ、私よりも、じっくり腰を据えて、山を眺め、写真を撮る。今もようやくやく茜色に染まり、棚引く雲の中から、その頂を見せはじめた、赤石岳のモルゲンロートをカメラに収めている。

お花畑の中の急な径を登り切ると、荒川岳のコルであった。荒川岳は前岳、中岳、東岳(悪沢岳)の三岳からなり、いずれも3000mを超えており、中では悪沢岳が、最も高く、3041mである。既に登っていたパーテイーのキスリ、テグ

かなり岩陰に置かれていた。ここは岐路になっていたので、小河内岳、三伏峠を目指すパーテイーは、中岳、或いは悪沢岳を、千枚岳、二軒小屋を目指すパーテイーは、前岳を、それぞれ空身で往復する事が多いのだ。

ガスが激しく行き交う中を、カメラだけを持って、前岳へ向かう。北風がまともに当り、長袖を着込んでも寒い位だ。けれど前岳は、近かった。狭い山頂に立つと、朝日を受けた霧の中に虹の環が、出まっていた。その中央に、自分の影が映っている。いわゆるブロッケン現象だ。私にとって、三度目だった。それは、長くはなかった。

霧が晴れる前の、わずかな時間で
あつた。瞬時にして、空はぬける
ような碧空になつた。これから登
る悪沢岳の右肩に太陽があつた。
逆光線の中、悪沢岳は黒々と、
大岩塊の壁のように荘嚴に聳えて
いた。

再び、コルに戻り、身仕度を整
え出発。中岳には、15分程で到着。
そこから、一旦下ると、いよいよ
この山旅、最後の、そして最大の
山、悪沢岳への登りだ。岩にジグ
ザグに切つてある径を慎重に、黙
々と登る。太陽が影になつてしま
い、冷え冷えとすする。上部から
登頂を終えた、多人数のパーティ
が下りてくる。もちろん、登り優

先で、先に登る。皆、空身だ。

交す言葉も、元気が良い。(その急
なジグザグ径を、登りきると、す
ぐ頂上かと思つたら、そうでもな
い。それでも稜線上の上に乗つた
とほ、確かだ。岩の径を幾つも
越えて、まだ着かぬのか、と思ふ
頃、前方の岩の上に、人影が見え
た。それが頂上であつた。
7時16分、中岳から、一時間、
荒川小屋から、約三時間であつた。
悪沢岳よりも、赤石岳よりも、人は
多かつた。干枚小屋からの、パー
ティも多かつたのだらう。誰も
満足した顔をしてゐる。山まわたく
絶好の悪沢岳だ。

私達の「早登ち」は成功した。赤石、聖はもちろん、塩見岳が真近に立派に見える。富士山も東南に聖海を貫ぬいて見える。真上の空には、秋の鱗雲のような雲が、広がっていた。それだけ空気が清澄なうだ。F君も、今日の、いや今日の山行に満足したのか、陽光をいっばい浴びて、悪沢岳の山頂の昼寝(朝寝)を味わっている。

私は聖平小屋から、コースが一緒だった。単独行の関西からという青年が、岩角に腰掛け、塩見岳を見つめているのをみつけて、話かける。

彼は前岳へ戻り、小河内岳遊難

小屋に泊まり、三伏峠へ下り、登る予定だった塩見岳は、次の機会だと言う。彼も自分の山行が終りに近づいた事を、塩見を眺め、しくりと、味わっていたのだらう。

私は、あちこちをカメラに撮ったり、地図を広げて、山名を確認したり、まるで子供のようには落ち着かなかつた。この山頂から見える、全てを脳裏に焼き付けておきたかつた。それでも、その小さな祠に手を合わせ、この山旅の無事に感謝し、祈った。

(一九八一一年七月廿日〜26日)

(ウエ)

春の南会津の山旅

(56年5月)

祖父川 精治



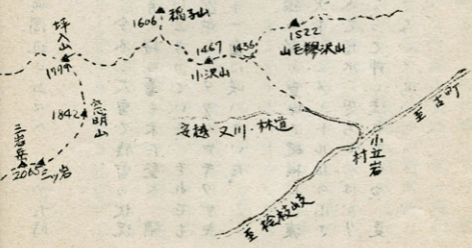
5月の連休に、松枝岐周辺の山々へ行った時のことである。

地元の人達の話では、今冬の大雪で、残雪の状況は、例年にくらべ一ヶ月、桜の蕾もまだ堅く、開花予定も、二週間も遅いと言っていた。それでも安越又川の林道を辿る途中、カタクリやキクザキイチリン草の花が、土手一面に咲いていた。

小沢の出合では、木橋が雪の重みで破壊し、渡れるどころではない。沢中、2メートル位の小さな沢であるが、雪解け水で増水、恐ろしいばかりに急流渦まき、奔流となって押し流れている。夏の濁水期には想像もできないくらい。

往きに渡渉できても帰りのこともあり、強引に渡ることばやめて、小沢の出合から直接、尾根に取りつき、かすかな踏跡を登ることにする。山毛櫛沢山と小沢山の中間、1436m峰を目指し、ぐんぐん高度を稼ぐ、この急登は、楽しかった。豪雪に耐えて、か細い枝を辿したマンサク咲く背景に、まばやい三ツ岩、窓明山の、まだ冬の残いの真白山姿。文字どうり全山ブナの美林といった山毛櫛沢山。

手にした松枝岐図幅、5万分の1、昭和21年11月30日発行のものでは、1432m峰、最新版では、1436mに、三本山毛櫛沢と記入がある。山の最底鞍部を越える、村と村を結ぶ、生活の径であるのに、この峠みちは、小立岩から登り、北側へ下ってゆくと、黒谷川の支流、小沢の源頭で美祿は消えてしまふ。狩猟、岩



魚釣り、山菜採りなどに利用され
たもので、現在は、そういう人も
なく、廢道となり、地圖上からも
消えてしまったのであろうか。

雪庇に大きな亀裂が入り、今に
も崩れ落そうな主稜を、小沢山を
越し、雪の斜面を下ると、稻子山
との鞍部に着く。そこのブナの太
木に切りつけが、刻まれていた。

明治45年3月14日

小立岩村

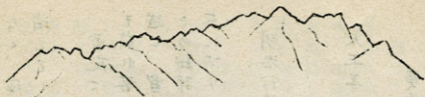
豊碓 19才

大正年代(年月不明)

喜平 13才

寅蔵 19才、
運治 16才

春の堅雪を利用して、熊打ちに
きたものだろうか。冷たい石に刻
まれた文字と異なり、人々の暖か
な温もりを、そこに感じてブナの
木肌へ、そつとふれてみた。灰色
のブナの幹にみる切りつけは、風
雪に負けず今も読む事ができる。
すっかり葉をふるい落した樹林の
向こうに、稻子山の荒々しいガン
クらが望まれる。腰の鉈を抜き、
柔かなブナの幹に刻む足元は、白
ブナの木屑が、こぼれていった。
その時、とうとうな語らいが、
あつたのだろうか。年月と名だけの
物だが、寂しい山での生活が、一刻
も早く帰りたいと思う、彼等の胸の
内を、そこに見る事ができる。




正月単独行の北八ッ横岳

昭和27年1月1日・2日

宮沢のり子

自家営業の爲、泊まりがけで山へ行く事は、中々大変なうです。正月三ヶ日は休業。なんとしても泊りで山へ行きたくなるが、友達に恵まれない。暮になると少タイライラしてくる。いろいろ考えた末、ロープウェイで、易しく標高(2300m)に運ばれる北八ッピラタスロープウェイに決めた。初心者でも登れるという北横岳。主人も私の気持を察して、「お前一人で行って来たら」と言ってくれた。嬉しくてイソイソと仕度に取りかかる。ゲアルヤツケ、オーバースボン、ロングスパッツ、アイゼン。今回はいちばん重いと思う、主人の釣り用の滑り止めにした。やはりアイゼンの方が、積雪量や寒さに供えて良いと思う。



山。この時は、夕方から雪となり、翌日の帰りは初のアイゼンにお世話になった。

そして、次の正月は横山さん、小室さんと同行させて戴いた赤岳鉱泉。次の年は、行者小屋迄行けた。

翌年一月、店の改装の休日を利用して、脇さんの安達太良山、小宮さんにも、お世話をかけた。晴天に恵まれたが、安達太良山に登る時は、ふぶいていて積雪も多かった。この様な雪山の経験に自信を持って出かけたのは良いが、さすがに心細かった。

八王子9時42分発。あずさ5号、し特急。甲府から腰掛けられた。バスもロリフォエイも、すべて連絡よく、13時、山頂駅に着く。坪庭からの眺めは素晴らしく、南アルプスが美しかった。あ、一人で淋しくても来て良かった。と、しみじみ感謝した。

結枯山荘へは、良く踏み固められていて、10分で着いた。個室で、夫婦二組と私。皆、シユラフを持っていたので、朝の寒さは、さすがに厳しかったが、良く寝られた。



高齢者の単独行は、よく問題が起こり、私も絶対反対だ。たのには、ましてや女性一人で一寸、負取かしい気はした。吹雪いたら、止めようと思つたが、曇、時々晴れで、おだやかな正月二日、横岳だけ登る人は少なく、私と若い男性一人だけだった。重いリュックなので私とバランス良く頂上で、シマツターを切ってもらつた。

道は一本道で小屋から5分も歩くと坪庭の横岳への分岐点に着く。道しるべは、長くついていて歩き良い。展望こそ半分も得られなかつたが、登りついた南峰、一寸ゆくと北峰。満足して下山する。途中、北横岳ヒエツテを熱いコーヒー(350円)を飲み、セツ池も往復して小屋に帰つた。小屋の御主人も奥さんもおホットした横で迎えてくれた。

やっぱり友達がほしい。夏山は、三回も(木曾駒、常念、北岳)と行けたのに、残念だった。福祐山へも、一本道だそうだが、一人なので止めて、ロープウェイ駅、12時20分に乗り、下山。この感動が忘れられなくて、私は又、山に登るだろう。



1974年

74年は友達とニ

人でヨーロッパ各地

をまわりました。

やはりリアルフスに

もう一度行きたか

つたので、昨年と同じシヤモニー

ツエルマツト、グリーンデルワルトへ

寄り、ハイキングを楽しみました。

ツエルマツトでは、昨年見つけた、

ほぼ同じ場所で、再びエーデルワイ

スに会えたのが感激でした。

75年、この年は、足井モンフラッ

ンに登りたいと思い、母と一緒に

行ったアメリカをロサンジェルスを

別れ、友達のいるニューヨークを、

経由してシヤモニーへ、初めての

一人旅をしました。言葉も何とか

判るかな？ という程度なので、

少し心配しましたが、無事シヤモ

ニー到着。友達とも合流できて、

ホツト一息。これで、もう凶々し

くなくなったので、シヤモニーからは一

人でイタリア側チルビニアから、

雪原を渡ってツエルマツトへ入って

みました。国境上の山小屋は、近

くのアライトホルン等へ登る年配

のおじさん達が泊まっています。

マツターホルンを常に左前方に、

見ながら、雪原を

下るのは、とても

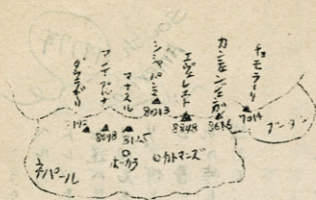
いい気持ちです。

さて、本命のモン

フラン。これは、



一週間シヤモニーで天候待ちのあげく、雪線が毎日下が、てくるので、泣く泣くあきらめて、この年は終まいとなったのです。



ASIA 1976年 NEPAL

少し、ヨーロッパがあきたし、やはり世界の最高峰を見たい、という事で、76年はエベレスト街道を歩きました。往復5日間のトレッキングは、毎日珍らしくて、あつという間に過ぎてしまいました。登りでは頭がガンガン、顔はむくみ、とてもひどかったけれど、テベツタン靴をはいて、軽い足どりで夕日のエベレストの見えるカラパタールへ登り、私の傑作写真、「月とエベレスト」を、写せました。

翌日、ベリスキャンフへ、やつとこまの思いで往復したけれど、ここはアイスフォールと見ただけなので、余り感激はしませんでした。

日本へ着いた時、ひどい日焼けで皆がビックリ。あきれていたようです。

South
America
ペルー

1977年

こうなると、決はどこ？と、考えて、行く事にしたのが、ペルー。ここではペルー最高のワスカランという山の麓を、トレッキングしました。ペルーはよほど話題がないとみえて私達が空港へ着いたら、新聞・テレビの記者がいて、女性だけ10名を集めて写真を撮りました。翌日、新聞を見てビックリ、何と私達が写真・名前入りで、ワスカランに登りに来たこと、書いてあるのですから。私達はそんな事、関係なく4千メートルの峠を越えて、アマゾンの源流地帯を歩いたり、再び峠を越えて、素晴らしいトレッキングを終了させました。

アラスカ、これは母が、たまには一緒に行きたいと言うので、決めた旅行。ただの旅行ではつまらないので、マッキンレー国立公園でキャンピング生活をするツアーを申込みました。アスカレッジから汽車に乗り、公園へ。入口で食料を買ひ込み、ヤフそくチケットを張りました。翌日は、バスで移動。公園内を無料のバスが走っていて、とても便利です。

1978年
ALASKA
U.S.A.



途中、グリズリーがバスの前を歩いていたり、熊マツキ
ンレーの雄大さに見とれたり、公園の広さにビックリした
り、あつという向の一週間でした。皆で氷河の末端まで行
った時等は、熊が恐くて大声で歌ったり、それは大騒ぎで
した。でも、公園を1日だけ見て終わせるのは、もったい
ないもの。5日間のキャンブはテント張り、食事作り、周
りのキャンピングカーで来ている人達の楽しそうな様子、
どれも一日では、味わえない楽しさでした。

さて、次の目標は、キリマンジャロ。アジア、南米、北
米とくれば、次はアフリカ。この山は、高度はあつても、
登れる山なので行く事にしました。キリマンジャロ空港に、
降り立つと、さわやかな空気が、楽しそうにスタンプを押
してくれる入国管理官がとも印象的です。ホテルへ行く
途中、夕日に赤く染まったキリマンジャロが遠く見えて
いました。翌日、王シのホテルがう、いよいよ入口へ。この



富士

入口でホーターを頼んで、いざ出発です。少しずつ高度を
稼がながら二日目、はるか彼方に頂上の雪が見えてしまし
た。あんなに遠くて大丈夫かな？と、一瞬ドキツとする程
の所にあるんです。でも到着、最後の小屋を出発する日、
真夜中の午前二時。眠い目をこすって、登る道は、了度、
富士山を登っている感じです。頭がズーンとして、足は上
らないし、でも、やつとの思いでギルマンズ・ポイントへ、
到着。キリマンジャロのあの有名な雲を踏み、氷河と目前
に見る事ができました。少し休んだら元気が出たので、さ
え最高峰へと思った時は、ガイドが到着していなかつたの
と、時間不足だったのとで、とても残念でしたがあきらめました。

今朝、出発した小屋迄は、砂走りを下る要領であつたという間に着いてし
まいました。下へ着くと、ギルマンズ・ポイント迄だったけれど、証明書も
くれたのが、せめてのなぐさめです。

帰りは一週向、パキスタンを過しました。本当は政情不安をなければ、
カイバル峠を越えて、アフガニスタンに行きたかつたのです。でも、パキ
スタンの山奥は人柄も、とても良く、素晴らしい所でした。

私にとって南極を除けば、最後の大陸は、オーストラリア
 でした。母と話がまとまり、二人で行きました。何しろ広
 いので移動は、一ヶ所を除いて、全部、牽行機です。今迄、
 あちこち廻ったけれど、ここ程、親切な人ばかりの所はあ
 りませんでした。オーストラリアには山らしい山はないけ
 れど、下度、おへそみだいにオーストラリアの真中に、エ
 アーズロックという赤い岩山があります。もうずいぶん前
 に知ってから行きたいと思っていたので、旅程に組みまし
 た。余り時間がなかったけれど、せっかくなので、来たのだからと
 ちまっとの時間を利用して、半分程、登ってみました。何
 しろ平原のド真中、はるか彼方まで赤土の平原が続く中、
 一ヶ所、唯、オルガという岩山群の出っばりが、もこもこと
 見えるだけなのです。さすがオーストラリアでした。

お隣のニージーランドは天候が悪く、ミルフォードサウ
 ンドは雨の中。船で行くと、まわりの岩壁には雨の為、無
 数の滝が掛っています。大きな滝も、普段より、水量が
 多く之派でした。余った一日でスキーをしたけれど、日本

地王線



1980年

AUSTRALIA



のスキート場の方が私にはあつていゝ確な気が
しました。帰り、クイーンズタウンからクラ
イストチャーチへ戻る途甲で、靴クツクモ、
ちらつと見る事が出来ました。

★

★

★

NEW

ZEALAND

1981年

これで、5大陸を踏んだので、おし
まいと思つたけれど、もう一度、一諸
に行きたいと、母が言うので、81年は
スイス、スペイン、シンガポールへ行
きました。久し振りのアルプスを母とハイキ
ングをして堪能しました。

こうやってみると、ずいぶん、あちこち、行ったもので
す。どこが一番、良いか、と聞かれても、
それぞれ良さがあり、特定の場所と、あ
る事ができません。何でもやってくゝる団体
旅行に参加せず、キャンプやトレッキングを
楽しんで、又、自分で計画して個人旅行をし
たという事が、何れも楽しい思い出作りだったと思ひます。



北村 夏

鳳凰三山縦走

七月の或る日、星野さん御夫妻から、鳳凰へ一諾にどうぞ下かと思緒を載せ、丁度、何処かに行きたくてうずうずしていた所だったので、即決定。当日、星野さんの愛車に便乗、一路園の中、横浜を後に中央高速道を飛ばす。12時過ぎ、月が山の端にぼ々と照る。

広河原へと到着。真夏とはいえ肌寒く夜気が、しんと身に沁みる。夜明け迄の、わずかな時間を、明日にえなえ仮眠を、むすぼる。朝、小鳥の声に起こされ、ねぼけまなこを、野呂川の澄み切った水に浸す。水はものすごく冷く、あつと言う間に、頭の芯まで、すつきりとする。到着の登山者に乗せてきたタクシーと交渉し、夜叉神峠登山口に戻る。昨晩は暗くて、見えなかつたが、道の片側は、ぼろか下に光っている水面迄、切立った。がけになっている。

夜叉神峠登山口と書かれた、道標の横を入いる。最初からの急登に、あえぎあえぎ、ふと道端を見るとき、純白のオダマキが、頭を下げて我々を迎えてくれているようだ。一汗かいた頃、1770mの夜叉神峠へ、登びだす。あたりはガスが一杯、朝食をしていると、ガスの切れ向より、「白峰三山」が顔をのぞかせた。峠の落葉松と雪を残した三山、天気が良ければ、素晴らしい眺めだろう!!

やや平坦な路を落葉松林の中へ、途中、見渡す限り焼野原とたつている山火事跡を過ぎ、雨にたたかれ、南御室小屋に着く。ここは、

周囲を林で囲まれた静かな盆地だ。一息入れて、今日の目的地である薬師岳小屋へと急ぐ。何しろ午後4時迄に、小屋に着かないと、夕食にありつけないのだから。小屋に入り、一息つくまもなく、耳をつんざく雷鳴と共に、滝の様な雨。小屋の人の話だと、夏は、一日一度は必ず降るとの事。この雨で、周辺が原生林が茂っているのだらう。雨具は絶対必要だ。

翌朝4時起床。明けやらぬ山路を薬師岳への頂上へ。頂上へ着くと同時に、東の空から金色の矢が走り、みるみる内に太陽が顔を出す。何時見ても、日の出は神秘的

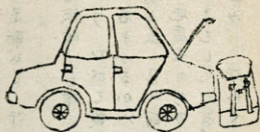
で素晴らしい。寒さも忘れ、無心に
シヤッターを押す一刹。振り返れ
ば北岳、同の岳に今、我々の立っ
ている鳳凰三山の影が、はつきり
と映っている。北岳の頂上付近は
モルゲンロートに輝き、色は刻一
刹と変化している。やがて雪渓に
おかわれたバットレスも手に取る
ようで一足飛びで、行かれそうだ。

今日は快晴。日峰三山を左手に
眺めながら、やがて観音岳の頂上
へ着く。右手はるかハヶ岳、前方
に甲斐駒ヶ岳、目の前に、これか
う行く、地蔵岳のあのオベリスク
が手まねきをしている。オベリス
クをのぞみ、一汗かくと、赤又ヶ

沢ノ頭に着く。ふと気がつくと、
重の切れ目に槍ヶ岳が一瞬見える。
まわりの景色を眺めながら大休止。

2750m地点にて、よせば良
いのには、登山記念にと、4kg程の
模様のきれいな石を拾い、広河原
峠よりの急坂を、途中、また雨に
会い、何度も投げ出しもうと思ひ
ながら、かつ下し、無事、我
家へ。家には、今迄の山行にて拾
ってきた石がたくさんあるが、今
回の石が一番大きい様だ。南アル
プスの山の上かう、我家の庭に、
連れてこられた、このしま模様の
キレイな石と共に、今回の山行も
又、胸に残る、素晴らしい山行でした。

那須初山行



今年も又、横山さんが、春から三斗小屋へ入ると言われたので、私達も行くことにしました。

一月二日早朝、4時10分出発。行き交う車も無い市内を抜け、首都高に乗り、星笠を眺めながら東北自動車道を快適に飛ばす。矢板を過ぎる頃、朝日が昇り、これから登る那須の山々が、赤く美しく輝き、私達を迎えてくれる。

7時30分、大丸温泉着。仕度を整え、サアー出発。去年は横山さんが大丸迄、迎えに来て下さったが、今年はお断りしておいた。前回は、山麓駅で気分が悪くなり、横山さんにカツクを背負ってもらい、やつと峰の茶屋へ、登ったが、今日は雪も少なく楽に歩ける。途中、下つてきた人が、雪が去年の三分の一、位しかなくて、つまらないと言う。青い空がどこ迄も広がり、那須野ヶ原の遙か彼方には、キラキラと海が光って見える。

登るにつれて、風が強くなる。道標の所でヤツケを着る。強風に吹かれてつ峰の茶屋。9時30分着。熱いコーヒーで体を暖める。この頃から、きれいな青空が消え、雪がちらつき始めた。先着の人々がザツクを置いて、茶臼岳に向かうので、私達も登るが、一段と強まった風と雪で、顔が刺す様に痛む。若い人達が、すぐですばと、声を掛けてくれる。

あえざつツ 登リし拔に

若者は 頑張ってよと

はげましくるゝ

頂上は何も見えず、小さな石の社があるだけ。でも社や岩に凍り付いた雪が、きれいな模様を付けている。避難小屋への下りは氷の上に乾いた雪が積り、ツルツルと、滑っては転ぶ。

音も無く 降り積りゆく

雪道を 滑りつふたり

黙して歩む

小屋からは、さすがに雪も多くなつたが、樹間の道は、風も無い。三斗小屋、12時15分着。横山さんが、「遅いから来ないと思った」と言いながら、出迎えて下さる。午後、少し晴れて来たので、隠居倉

かう、出来れば、朝日岳迄、登ろうと、出掛ける。しかし、温泉源から上は、雪が深く、登るより、滑り落る方が多く、横山さんが、一歩づつ雪を、踏み固めてくれる。

我が為に 歩きやすく

一歩づつ 踏みくれし跡

謝しつゝ登る

やつと、歩き良い尾根道に出る。隠居倉から、時折のぞく太陽に、うっすら見える峰の茶屋を望みながら、二つ程、ピークを越えた小広い雪原で、ティータイム。主人は朝日岳迄、行こうと言うが、私は雪が目にしみて、痛む為、無理

は嫌と、引返す。帰路、尾根の下りは、尻スキーで速い。

童心に 帰りに楽し 尻スキー
歡聲あげて 斜面を走る

温泉神社に100円玉を投じ、今年
の山行の無事を祈って、宿に入る。
「ア」 疲れた。

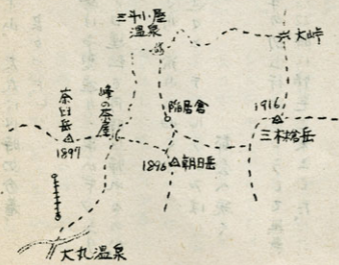
翌朝、一酸化炭素中毒で、頭痛、吐気、食欲なし。明日帰る横山さんが、天気だから、朝日岳を越えて行けば、と言われたが、とても登る気になれない。真直ぐ帰ると、宿を出る。廻が、外は、昨日と、うって変わって、

風もなく素晴しい上天気。雲一つない青空に輝く、純白の山々、頭痛など吹飛んでしまった。峰の茶屋にザックを置き、無間地獄に行く。

地鳴りして 青き空迄 噴きめぐる

けむりに茶臼 頂上見えす

遠く連なる上信越の山脈の上に、一際高く燦々岳が見える。更に、昨日登った、隠居倉から登れなかつた朝日岳と、素晴しい眺めに時の立つのを忘れ、シャツターを押しすが、忙がしい。さて、下るかと思を上げた時、宿で逢った人達が、朝日岳から下りてきて、今日は、すこいよ、蔵王が見えた。毎年来るけど、こんな天気は初めてだよ」と言う。そして、2時間見れば、十分だから登ってきなさい、と推めてくれる。時計を見ると、12時10分過ぎ、思い切って、登ってみるか。途中、



氣を付けて、と注意された鎖場も
苦にならず、は時丁度、朝日山
頂に立つ。

「ワー、素晴らしい、素晴らしい」

お山の大将、二人だけ。どれが蔵
王だが、判らないけれど、見える、
見える360度の大展望。三本足りな
い頭では、この素晴らしい眺めを、
的確に表現出来る言葉がない。

「茶臼岳の右、後の方には高原山、
それとも日光、いや多分、形が赤
城と稜名、それに煙が見えないけ
ど、あれは浅間よ」と勝手に決め
る。カメラに収めて、後で聞けば
良いと、思っただけに残念、フィルム
切れ。下の方に湖も見える。

登って来た人に頂上を明渡し、

一路下山。大丸に4時0分着。
「ア、良かった。」

帰路は予想通り、車がギツシリ。
ノロノロ運転で何時に帰れるのか。

赤き川 流れし如く

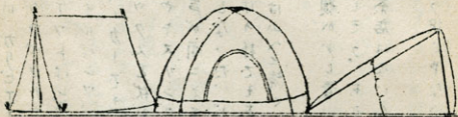
近々と ティールランフは

都会へ続く

今年の初山行は、こうして無事
終了。22時に帰宅出来ました。

星野喜美子 記

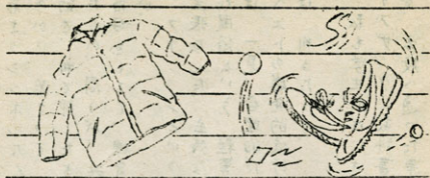
家は3軒、持っていた。妙な
 な雰囲気になったのは、
 昨夏、4軒目を買って、6畳
 の借間に積みあげた頃なのだ。
 何だテントの事かと、おっ
 しゃいますか。妙な、と言う
 のは、さういう言い方が、古
 くなってしまったと言う事な
 のさ。今はソフトハウスと言
 わなくては、いけないんだよ。
 確かに、BACKPACKINGな
 のバックパックの流行と共に、
 軽いドーム天蓋（ムーン）が、主
 流となってより、新製品につ
 ぐ、新製品の氾濫に、とまど
 っていたところでは、あったの
 だけだ。



賞 愿 吐 愿 で の ク ス タ ヴ

シェイプアップされた
 体は若者のステイタス
 シンボル。かくて、デ
 スコヤ、道路上のスケ
 ボーや、壁夫さん、崖
 子生んとのテニスや、
 車の上のサーフィン等
 に飽きたステイボーイ達
 は、アウトドアライフを
 満喫しようとして海に
 行くが、どつと、山に
 くり出す事となった。

中 村
 賢 治



んだろうが、近ごろは特に、冬はヘビータイトイ
 と称するファッションが街を占領してしまつた。ヘビ
 タイトイと言え、登山こそ、その際たるもの。か
 くてダウンジャケットにタイバックが、闊歩してゆく事
 になる。でもねえ、流行させるものが少し違つちや
 ないのかい。

なせ、タイバックを背負うの？ 便利だからだと
 言うんだろう。出し入れを考えると、シヨルダール
 の方が、すつと便利じゃないか。街の中で、何を
 そんなに両肩で背負わねばならぬ程、持ち歩くんだ
 い。ダウンは確かに軽くて暖かい。しかし、遠征隊
 用ほどの羽毛じゃ、暑すぎやしないのか。街の中で
 上半身しか、おおえないのに、軽さを追求しなくちゃ
 いけないのか。ナイロンなのに、歩きタバコが、よ
 く平気だね。

俺たちや、若いからぬ。これは若さのシンボルなんだ、そう言うのだから。若さって、そんなに画一的で、判で押したようなものだったのめ。周りが、みんな同じ様な格好をしてて、嫌気がささないのか。

ファッションというのは、個性の主張なんだ。主張なき流行を軽薄な風俗という。軽薄な、というのは、一見、合理的だった、ダウングレストの爆発的流行と衰退を見れば、判るだろう。

私も学生時代には、ヤツケを着サスザツクに教科書と、つめ込んで、学校へ通った事もあろう。その

時、私を包んでいた冷笑が、今はデイバックを、持たない人間に、向けられている。当時の私が、周囲の目を気にしなかつたのは、街に、いるのが、飯の姿だったからだ。学校帰りでも、山に直行する事ができたからだ。ヘビィデューティは機能すればこそ、美しい。今じゃライオンになる為に、爪をつけるんじゃない。軽薄な流行の中に安堵する為だ。

登山用品店直行族が、こうしたヘビィデューティ派と同じだなんて、勿論、思っている訳ではない。少くとも、いくらかは厳しい環境を、暮す装備だからね。しかし、そう

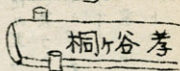
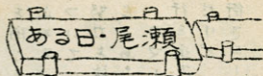
いう装備も、何も山用品で揃えねばならぬというものではないだろう。親父のらくだのシヤツをくすね、釣道具や、シヤング屋を回つても、いいじゃないか。

金があるなら、そして本当に必要なものなら、なるべく良い装備を揃えるがいい。しかし、せめて止めて欲しいのだ。羽毛服の胸についている三角マークを誇示して、努力を積み重ねてやってきた人間と、あざ笑うのは、

コマーシヤリズムに乗っかった流行を追求するのは、それは勝手だ。だけど、雲の頂へ至るのは、冬の街でコートというお耐寒力であり、

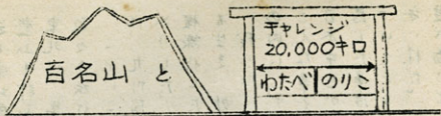
長次郎谷をシモンのピツケルなしで下れる技術であり、羽毛シユーフを持って行かずとも、日帰り出来る体力であり、山に行きたいかう、その様にならうとする日々の努力なのだ。クラウドに輝く真新しい装備を背に、青息吐息で登ってくるのは、クリスタルな登山かい。

見たまえ、山頂にたたずむ影を、やせけてボロをまとっちやいるが、山の情熱を杖めた目の澄み、た美しさ。そして理解しようではないか。輝くものは、三角や丸のワッパンに飾りたてられたブランドなんかじゃなく、憧れに満ちて、や、て、た自分自身をたという事を。



小雨の中を、新宿からバスを利用して、夜行日帰りの日程で、尾瀬に行った。冷気と敷しい流れの音に、目をさまし、大清水に着いたのは、午前3時頃だった。なだらかな盛りを、懐中電灯の灯を追いながら、歩き始めた。一時間もすると、樹々の中腹を桐窟が立ちこめ、白々と尾瀬の夜明も告げる。

一の瀬で早い朝食を済ませ、あえぎながら三平峠を越え、尾瀬沼山荘に着くと、そこは都会のにぎわいだった。湿原の木道も、赤、黄、青の行列が、新緑の中に、時に雲間から差しつける太陽に、一段と映えている。雪が残る雄大な燧ヶ岳が、静かに湖面に写り、清楚に咲く水芭蕉に、紫や、ピンクの蕾をつけた、小さな湿原の花々に、思わず、近よって、シャッターを切る。足元が泥沼に、又、小川になってしまふ事も度々だった。10年末の持帰り運動が突って、ゴミはほとんど無く、尾瀬沼を一周して、2時出発のバスにと、雨の中を、ただみたすう歩いた。快い疲れに、バスの中は、いつしか無言になり、限りなく広がる尾瀬の風景は、浅い眠りの中に、さざまな型で、現われた。(終)



有名な深田久弥氏著、「日本百名山の本」に出逢ったのは、55年支那山行「四阿山」の時だった。同行者御持参の、その本を一読させて貰いて、私も百名山をめぐらす事にする。帰洪し、すぐ本を買い、残りは70山くらい。前途は長いなと思つていると、55年4月から国鉄の「チャレンジ」2万キロという、国鉄全線に乗りましようという、期間10年という長いキャンペーンが始まっていた。百名山をめぐると、日本の北から南へと行かなくてはならないし、未だ訪ずれた事のない所に出掛られる事も魅力的だし、と、考えて「チャレンジ」になった。これも予約、2線区という遠大な路線に、乗車しなくてはいならないので、週末旅行者として、先が長い話となる筈だった。しかし、56.4.20の国鉄運賃と同遊券の大幅値上げをきっかけとし、登山行きを計画するより、国鉄乗車を優先とする旅に、お金と暇を使う事になった。こしまつた。

56年5月連休は、北海道周遊券と航空券、夏休みは北海

道と東北周遊券、航空券を往復という散財し、登山も計画に入れておいたが、夏の北海道、東北は、集中豪雨と台風にお逢ってしまい、散々の旅行だった。

これにこりず、67年末から69年正月の休暇は、九州周遊券を用意し、長崎に飛んで九州入りした。九州は北海道、東北に比べると、複線化した路線も多く、特急列車可のメリットも生き、効率的に回る事が出来た。

残りは、山陰山陽、四国地方なので、67年の内に、「チャレンジ・2万キロ」の旅も終るでしょう。

こんな事々、思いがけず、列車で短期間で、日本中を駆けめぐり様な事を実行してみても、

感じた事は、関西以南地方の方が、歴史と伝統に支えられて、昔から住みついていいる人が多く、中つたりとして、食物は新鮮、おいしい、物価も安い様だ。従って生活は豊かな感じがする。我々が住んでいる所は人口密度が高いいせいか、住宅事情が食しく、損な生活圏にいと、思った。(完)



後半到着原稿(多め)をボールペン1本で製版しました。仕上がりはかなり違う事と思いますが、素人が気軽に書きましたので、悪しからず御諒承下さいませ。題字をもう少し変化つけられなかったかなという事と、ゴチャゴチャした絵が失敗だと思っ

